

山形市上桜田集落の風景に関する研究

A Study on the Landscape at Kami-Sakurada Village in Yamagata City

温井 亨

NUKUI Tohru

The aim of this paper is to clarify the system which maintains the landscape of Kami-Sakurada Village by analysing the irrigation ditches, the farmhouses and their site plans. The results are as follows; 1) There are two sources of irrigation ditches. Usually the source is Ryuhzan River, and when its water is in short supply, they use the second sources, two ponds of Nishizaoh. 2) The farmers created the present size and shape of rice fields in 1970's by themselves because of beginning to use a tractor. 3) Till about 1970, they used the water of irrigation ditches for washing farming tools, tablewares, vegetables and for taking a bath. 4) In their sites there are clear boundary signs, such as stone walls, hedges, irrigation ditches and warehouses, which are arranged around the boundary lines. 5) As the street landscape, it is very important that traditional warehouses (dozoh, itagura, momido) are arranged around the street, because they are beautiful elements of the landscape in comparison with the mainhouses which have been already rebuilt in general.

1. はじめに

山形市大字上桜田は、山形市の南東、蔵王連峰の前山である西蔵王の山麓にあって、一面の棚田が広がっている。その中には、道に沿う路村部分と、一部散居状の部分から成る上桜田集落が立地している。ここはまた、西蔵王から流れ出る竜山川や馬立川¹⁾がつくる扇状地であり、正面には山形盆地、山形市街を一望でき、その向こうには葉山、月山、朝日連峰を望む景勝地である。

しかしながら、この上桜田の地は、現在急速な変貌を遂げつつある。1992年、棚田の中程に東北芸術工科大学が開学し、また数年のうちには大学下の水田も区画整理事業により住宅地に変わる。集落内の伝統的家屋も区画整理を機会に、既に相当数の建て替えが進んでいる。

この小論の目的は、上桜田の変貌に立ち会うこととなった本学教員の一人として、かつての上桜田の風景、特にその魅力を記録に留めようということである。またその中で、風景をその基礎で支えてきた仕組みを描き出すことである。上桜田のような里の風景の場合、その風景美は元来美を目的としてつくられたわけではない。風景を形づくったのは、農民の耕作と生活であり、美はその結果として生じたものである。特に稲作地帯でまず考えられたのは、水田の水の確保であり、農業用水路をどのように引くかということであった。

そこで本研究では、まず上桜田の堰（山形市周辺では農業用水路を堰と呼ぶ）を取り上げる。市街化の進みつ

つある上桜田では、堰のシステムは分かりにくいものとなっている。伝統的な石積みの部分が残る一方で、コンクリート製のU字溝や、道路の側溝となっている部分も多いからである。

次に、集落内住宅の屋敷構えと建築を扱う。建築は風景の構成要素としての重要性和、また既に多くが建て替わってしまっている希少性から緊急に調査の必要がある。一方、屋敷構えは、今なお伝統的な形が残っていることが想像され、加えて、東北地方に於いては特異なタイプではないかと考えられる所から調査対象として取り上げた。一般に東北地方の農村屋敷は、境界表示の明らかでない例が多い²⁾が、上桜田集落の場合、敷地境界上に付属屋や石垣、生け垣などを廻して閉鎖的な外観をつくる特徴がある。このような屋敷構えは、今後周囲が住宅地化しても、かつてのたたずまいを内部に保つことが可能ではないかと考えられ、歴史的風景保存の立場から興味深い。

研究の方法としては、集落及び堰水源地の踏査の他に、集落から6軒の住宅を選び、屋敷構えの調査、建築調査、そして聞き取り調査を行った。調査の時期は、屋敷構えと建築の調査が1997年3月、集落及び堰水源地踏査と聞き取り調査が1997年3月～1999年10月である。また、山形市広域都市計画図（1：2,500）と山形市芸工大前土地区画整理事業の現況図（1：1,000）を利用した。

2. 上桜田集落と堰

（1）上桜田集落に於ける堰の水源

上桜田集落に於ける農業用水の水源は、図1にあるように大字岩波の石行寺（しゃくぎょうじ）付近の竜山川と、西藏王の溜池である。前者は取水後、石行寺の門前でコンクリート製のアーチ橋（かけどい）により竜山川を渡り、県道沿いに流れ下る。これを三桜田堰と呼ぶのは、上桜田、中桜田、下桜田（現在の桜田東と桜田西）の3つの集落が水利権を持っているからである。上桜田の水田はほとんど、この堰の水によって維持されている。

一方、溜池は干魃のときに利用される。上桜田集落が利用できるのは、里尻沼（さとじりぬま）、田手沼（たでぬま）の2つの溜池で、里尻沼は上桜田が独占的に水利権を持っているが、田手沼は上桜田と中桜田の権利が相半ばする。利用の仕方は、干魃の際「どう」を抜いて沼

の水を流す。里尻沼の場合、水は水木沢（みずきさわ）を下り馬立川となる。田手沼からの水路は浮洲沼（うきすぬま：中桜田が水利権）からの水路と合流し、上桜田へ下る水路と中桜田へ下る水路に分かれる。上桜田へは、団子森沢（だんごもりさわ）を下り、水木沢と合流して馬立川となる。水田へは、馬立川の水を大学前の市道付近で取水して流す。

（2）主な堰と水利権

三桜田堰は図2にあるように、里江で分水し、またその後さらに細かく分水して上桜田の水田を潤している。このうち南側を流れる大堰は、中桜田の水田と、さらに下流の下桜田の水田も潤す。大堰には番水³⁾の取り決めが現在も残り、代掻きの時期5月8日以降10日間、6：00から18：00まで下桜田へ独占的に水を流さなければならぬ。

さて、干魃になると上桜田では止め水、時間水⁴⁾が行われた。流す時間は各堰ごとに決められている。また、水利組合の役員も各堰ごとの割り当てである⁵⁾。堰の名称と役員数は以下の通りである。北堰（きたぜき：2人）、柳田堰（やなぎだぜき：2人+青田集落から1人）、太子堰（たいしぜき、おでしさまぜき：2人）、一本田堰（いっぽんだぜき：2人）、大堰（おおぜき：2人）、今塚堰（いまづかぜき：2人）

（3）農業用水としての利用と稲作

ヒアリングによれば、上桜田集落で、集落内にあったシドロと呼ぶ湿田を乾田化したのは大正時代である。当時、作業は三本鋤による手作業であった。牛に犁を引かせるようになったのは昭和10年代半ばであり、耕耘機への切り替えが昭和30年代の前半、さらに昭和50年代にトラクターに変わる。トラクターを使用するには、以前からの水田1枚の大きさでは小さすぎたため、各家で導入時に田を整理し1枚の大きさを拡大した。現在の水田1枚の大きさは、このときの耕地整理の結果である。上桜田の水田の中にはこのとき整理しなかった水田も残っているが、それは図3に示す通り、おおよそ1/10以下で非常に小さい。

上桜田の水田には、堰から水田への水口を持つものと持たないものがあり、後者は上の水田から落とされた水を使うことになる。これを掛越（かけごし）と呼ぶ。水



図1 上桜田の農業用水と2つの水源

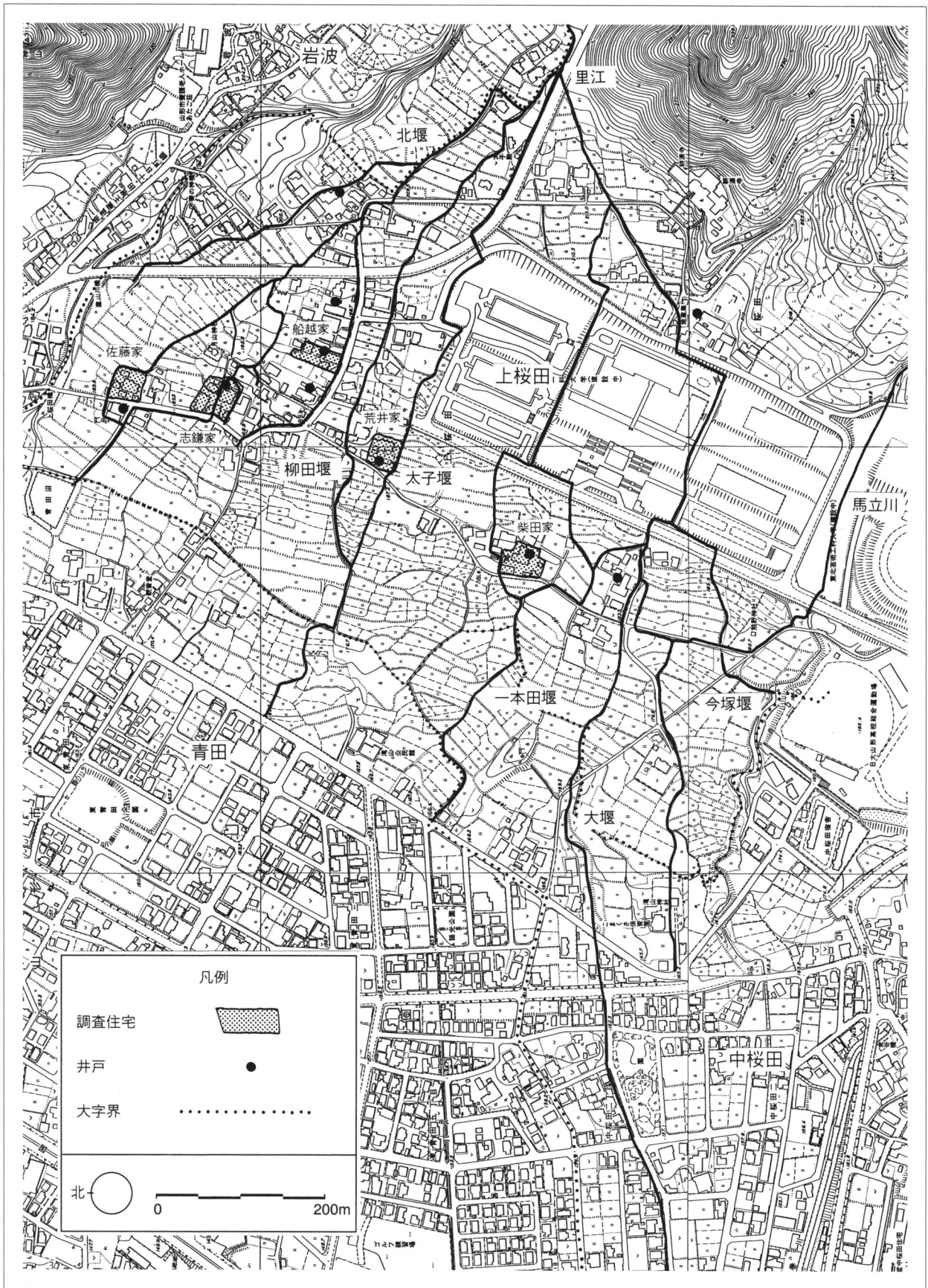


図2 上桜田の堰

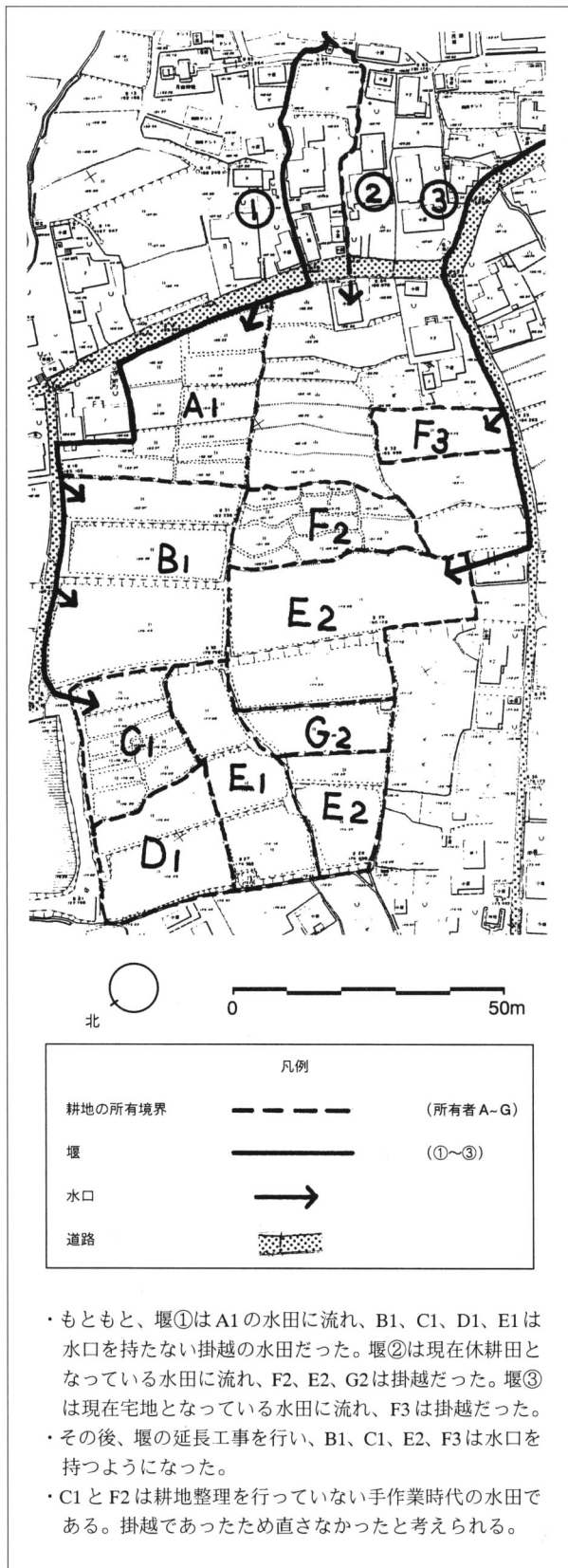


図3 水利と耕地の状況

田の所有関係と水の利用について図3を見ると、同一の所有者が持つ数枚の水田ごとに水口のある傾向が認められる。ヒアリングによればその理由は2つある。その1つは、干魃の時、あるいは最も水を必要とする代掻きの時などに、自分の水口を持っている方が有利なことである。他方、水口の水田の所有者にとっては、下にある他人の掛越の水田が無くなった方が良い。それは他人の分まで堰からの冷たい水を流すことにより、自分の水田の稲の生育が悪くなるからである。そうでなくとも、水口の田は犠牲にならざるを得ないと言う。そこで水口の田の所有者は、自分の水田が少し削られても、新しい堰ができて水が自分の田を通らなくなることを望む傾向がある。

(4) 生活用水としての利用

堰の利用目的は主として農業用水であるが、その他に生活用水としての利用も認められる。図6、図12のように、堰は集落内を通り、各屋敷内で「カワ」と呼ばれる小さな池をつくる。そこでは農具や食器、野菜などを洗い、また殆どの家庭の場合風呂の水も堰の水を使った。上桜田集落は扇状地に立地し水を得にくく、井戸の無かった家も多く、そうした家では井戸のある家まで汲みにいった。(図2)

3. 集落と屋敷構え

(1) 主屋の配置

上桜田集落に於ける住宅主屋の方位は、長手方向が南北（正確には南南西-北北東）軸である例が殆どである。これは西向きに下がる地形で、切土盛土をせず、等高線に沿って家を建てるには、長手方向を南北軸とせざるを得ないためであると考えられる。ヒアリングによれば、西向きを良しとする言い伝えがあったと言うが、このような配置がまずあって、後から言い伝えが生まれたと想像される。

(2) 敷地形状

敷地形状は前面道路を西側に持つ敷地と、南側に持つ敷地で異なる。前者は路村部分の場合も散居部分の場合も、ともに間口が広い正方形に近い敷地形状を持つ。一方、後者は間口の狭い短冊型に近い敷地形状となる。図

2に調査した6軒の住宅の敷地形状を代表として示す。

このような敷地形状が生じた理由としては、主屋の配置が考えられる。主屋が前面道路と平行の場合には間口は広くならざるを得ず正方形型の敷地となり、直交する場合には間口の狭い短冊型の敷地が可能だからである。

町家のように密度の高い集合を実現するためという仮説も考えられるが、その場合は、同じ路村部分で正方形に近い敷地もあることを説明できない。

(3) 付属屋の配置

上桜田集落の土蔵の配置は、敷地内で北西(乾)の方向に配置される場合が多い。その理由はヒアリングによれば、乾蔵を吉相とする家相にある。

その結果、南に前面道路を有する屋敷の場合、道路から見ると、道路と直交する主屋と土蔵が並んで見える。一方、西に前面道路を有する屋敷の場合、道路に面して土蔵、板蔵⁶⁾、モミド(モミを収蔵)等が並び、閉鎖的な屋敷構えとなる。

道路から見える上桜田集落の風景の特徴、すなわち一般に散策しながら見ることのできる風景の特徴に、道に面して付属屋が並ぶ風景がある。主屋と違って、土蔵や板蔵などの付属屋は建て替えられることが少なく、したがって道に面して伝統的な建築が並び、たいへん美しい風景を形づくっている。その場合、車庫は道路に面せずに奥に設けられるが、その分の除雪を厭わず維持されているのは、伝統的なたたずまいを大事にしていることその他に、山形の積雪が少ないためだと想像される。

(4) 明瞭な敷地境界

一般に東北地方に於ける農家の屋敷構えでは、敷地境界を明瞭に示すものがない場合が多い。しかしながら上桜田集落では、前節で述べたように道路境界に接して付属屋が配置されるなど、敷地境界を示す様々な要素が配される。その例を挙げれば、土蔵、板蔵、モミド、生け垣、石垣、堰などであり、これらが道路境界、隣地境界を示すこととなっている。

(5) 敷地全体に庭園としての魅力があること

敷地境界上に様々なものが配されることで、その中に囲まれた空間が生まれる。それは主屋などで分節され、様々な性格の空間となる。上桜田の農家は元来このよう

な特徴を持っていたが、昭和40年代に「カワ」を池に変え、石組みや樹木を植栽し、庭として整えることが行われた。その結果、用に美が加わり、敷地全体が、庭園とも見立てられる魅力的なものとなった。

さて、その魅力を、イタリアのヴィッラの庭園との比較で試みよう。イタリア庭園は傾斜地につくられたものが多く、斜面にテラスをつくり、そこに様々な性格の場所が展開する。しばしば、泉の湧き出るグロッタ(祠的な神性を持つ)があり、そこから水路が流れ出て池をつくり、果樹園を潤す。

一方、上桜田の場合には、たとえば志鎌家を例に取れば、道路に面した門構え、農作業ための庭等、緩やかな勾配に様々な場所が展開し、井戸を保護する小屋などはフォリー(四阿)のような趣を持っていて驚かされる。また、敷地内を堰が流れ、それが池を形づくり、畑、果樹園があり、最上部には氏神を祀る神社が配置される。以上の特徴は、上記イタリア庭園との類似を感じさせないだろうか。

次にヴィッラと農業の関係を考えると、ヴィッラはしばしば農業と関係し、とくにヴェネト地方に於いては農業経営者の拠点であった。たとえば、次のようなヴィッラの説明は、上桜田集落の魅力の説明としても聞くこともできるように思う。

「この泉は、小さい池となり、これは養魚池として役立つ。そこから溢れ出る水は、台所に流れ込み、それから、建物に向かってゆるやかに上昇してゆく道路の左右にある庭園をうるおし、二つの養魚池を形づくり、公道に面して、家畜の水呑場も設けられている。そこから溢れ出た水は果樹園をうるおしているが、この果樹園はひじょうに広大で、きわめて良質の果樹や、さまざまな雑木が豊富に植えられている。⁷⁾」

4. 建 築

(1) 伝統的家屋

調査した6軒のお宅のうち、主屋が伝統的なつくりで残っていたのは2軒である。そのうち柴田とみ邸は名主の家であり、間口8.4m桁行18.9mあり、普通農民層の家屋と比べて大きい。しかしながら、構造的には上屋梁間3間であり、床面積の拡大は、桁行方向を長くすることで実現している。

(2) 昭和初期の家屋

船越庄治邸は昭和11年のつくりであり、伝統的な民家のつくりとは違っている。小屋組は6寸勾配の和小屋であり、セメント瓦で葺いている。構造的には、上屋梁間4間で中央に牛梁が通り、これを1間ごとに上屋梁が上下から交互に挟んでいる。上下から挟めるのは、上屋梁が桁、上屋柱に対して交互に京呂組、折置組で支持されているためである。

間取りは土間部分が玄関の踏み込みだけとなり、その奥が囲炉裏のある板敷きの部屋で、流しもここにある。上手には畳敷きの部屋が六間取りになっていて縁側が廻っている。上桜田では昭和40年頃まで養蚕が盛んであり、家中でカイコを飼った。船越氏によれば、養蚕用の間取りという考えで建てたと言う。

この住宅は伝統的な茅葺きの民家とも、戦後の住宅とも違ったつくりであり、両者の中間的な存在である。注目すべきなのは、現代住宅が伝統的なつくりとあまりにもかけ離れ、集落の風景に対し調和を欠くことが多いのに対し、この住宅は風景と美しく調和していることである。今後の地域づくりで参考となる住まいである。

(3) 付 属 屋

まず、土蔵について見ると、上桜田集落で土蔵を所有する家はたいへん多い。調査した6戸のうち5戸が土蔵を持ち、そのうち3戸が蔵座敷を持っている。そのうち、柴田とみ邸の蔵座敷からは、石組みと庭木を配した池が眺められる。現在のように整備されたのは昭和42年と言うが、その前から庭として池もあったということである。元来農家のつくりは閉鎖的であり、座敷から眺める庭がいつ作られたかは興味深い。

また、土蔵には裏側にあるものと、道に面したものがあり、後者は集落の風景を形づくる重要な要素である。

次に板蔵について述べる。上桜田集落には板蔵が多く、これは構造的には3尺ごとに柱を建て、貫を通して固め、縦張りの板壁とするものである。これも道に面して建つことが多いため、重要な風景要素となっている。

小型の板蔵としてモミドがある。これは脱穀した籾を収蔵する建物で、しばしば入口のない、建物というより収納箱のようなつくりとなっている。柱間に板を落とし込みながら籾を入れてゆき、壁板自体を入れたり、はずしたりするという使い方をする。

5. むすびに

上桜田集落の農業用水は、竜山川から引いた堰と西蔵王の溜池により賄われてきた。

棚田の風景自体は古く遡るが、現在の風景となったのはトラクターが導入された昭和50年代であり、各農家が水田1枚1枚を自らの費用で拡大する耕地整理によって生み出された。

山形市街を見下ろす広々とした棚田の風景は、現在区画整理で失われつつある。一方、こうした眺望風景と違い集落内の風景は、敷地境界に付属屋等を巡らし囲まれた空間をつくるという特徴により、住宅地化後も維持可能であると考えられる。

建築的には、土蔵、板蔵、モミドなどの付属屋が、街路風景を形づくる重要な要素として今後とも重要である。主屋では船越邸が、これからの住宅づくりにとって大いに参考となる。

註と参考文献

- 1) ヒアリングによれば、上桜田では馬立川という名称を使ったことはなく、熊野沢(くまのさわ、おくまんさわ:熊野神社近くの沢から)、壇の前沢(壇(墓)の前の沢から)などと部分ごとに呼んだ。
- 2) 小倉強(1955、1972再刊)『東北の民家』、相模書房、P70、P80(再刊による頁)
- 3) 灌漑用水を順番で使用すること。(広辞苑)
- 4) 止め水は代掻きするとき、普通に分水しても水の回らない田に回すため、余所への水を止めること。時間水(じかんみず)は、生育期に水が不足した場合、時間を決めて一つの堰ごとに集中させて水を流すこと。(ヒアリングによる)
- 5) 2つの堰で役員に数えられている家もある。
- 6) 上桜田集落では、土蔵以外の付属屋を全てコヤと呼ぶが、本論ではそのうち土蔵と同規模で立派なものを板蔵と呼び区別する。
- 7) 桐敷真次郎(1986)『パラダイオ「建築四書」注解』、中央公論美術出版、P199-200

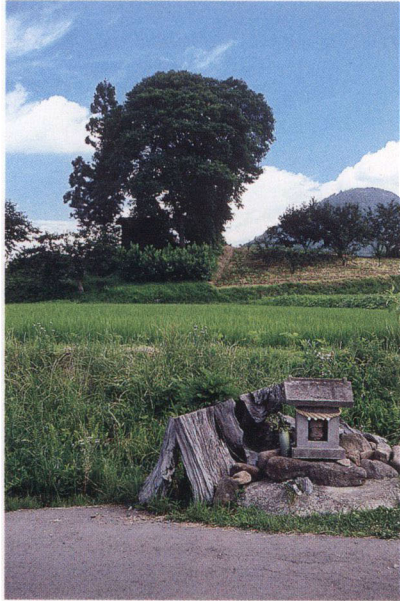


写真1 桜神様



写真4 水田と農家



写真5 秋の上桜田



写真2 秋の桜神様



写真6 熊野神社の杉林



写真3 桜神様より上桜田集落

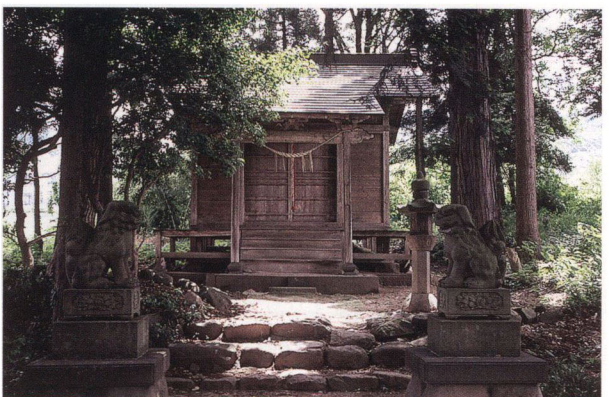


写真7 熊野神社

○佐藤喜蔵邸

佐藤喜蔵邸は路村部のはずれにあり、西北西側に前面道路を持つ。敷地形状は間口が広く正方形に近い。

(1) 敷地境界の構成

敷地境界は四周とも石垣とし盛土している。東から北にかけて、北堰から分かれた堰が流れる。東と北の敷地境界には木造の付属屋（コヤ）が境界に接して配置される。

図4、写真9に明らかであるが、境界が最も明示されているのは道路側の立面である。2～4段の石積みとし、入口回りでは右にモミド、左に板蔵を配置し、堂々とした構えを形づくっている。このモミドは比較的大型で、モミドとしては昭和28年まで使用した。また昭和初期、先代の新婚時代には夫婦の寝室として使ったと言う。造園的にも入口脇の植え込み、南側のカキ、北側のキャラボクやマサキの刈り込みなどが魅力を添え、道路側の外観はたいへん美しい。

(2) 敷地内の配置

道路と平行に置かれた主屋は既に建て替えられている。主屋前の庭は狭く、農作業としての利用は既に少ない。車庫は別棟を屋敷外に建てているほか、ここにパイプ車庫をつくり軽トラックを置いている。板蔵とモミドによる門構えが優先し、多少の不便は我慢している事が分かる。

屋敷内は幾つもの性格の異なった部分に分節でき、それぞれがそれぞれ魅力を持つ。①道に面した門構え、②農作業用の前庭、③写真10のコヤとその修景、④東と北のコヤとその間の空地、⑤修景された庭（池、石組み、植栽）、⑥花壇、⑦畑（自家用）。

美のための部分と、用のための部分の両面があるので魅力の幅が広い。池は美を念頭に近年修景された部分だが、かつては用のための「カワ」だった。今でも、主屋南側の畑で野菜を採り、この池で洗い、井戸でさらに洗ってから台所へという経路が生きている。自給自足の比率の高かった農家の生活が、今でも庭の中に残り、それが活かされている点が佐藤邸の魅力である。現代の生み出した余裕が庭の修景に結びつき、さらに魅力を増している。



写真8 修景された庭とコヤ⑤



写真9 通りに面する板蔵、キャラボク①



写真10 コヤ前の修景（ヤツデと唐臼）③

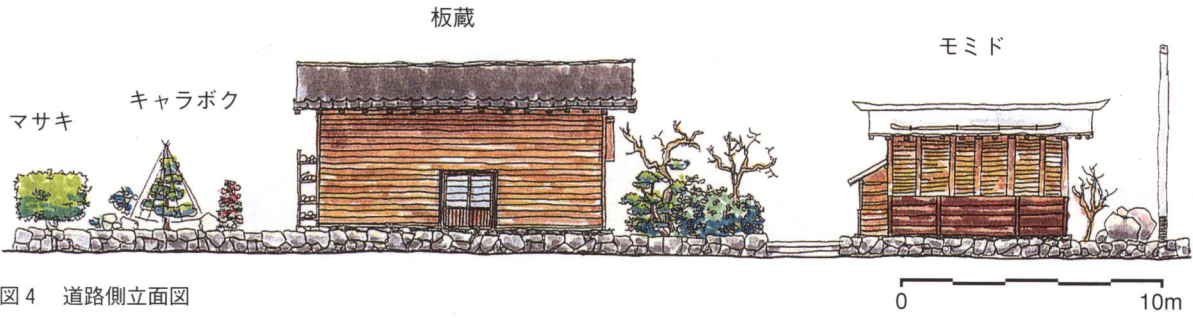


図4 道路側立面図

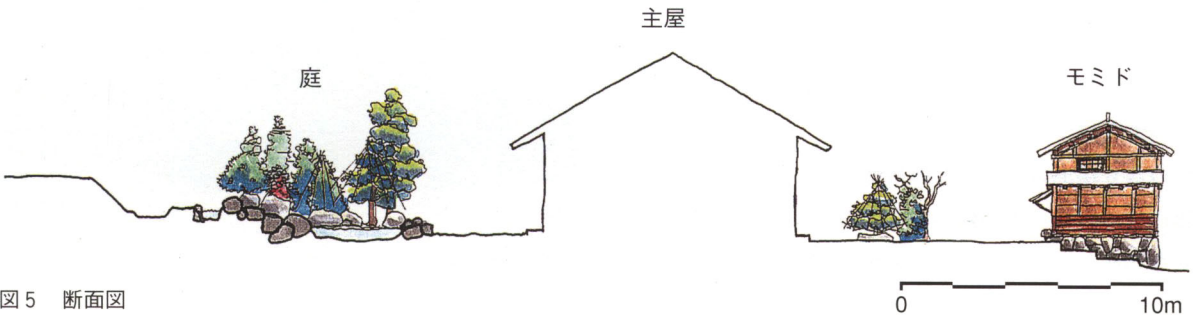


図5 断面図

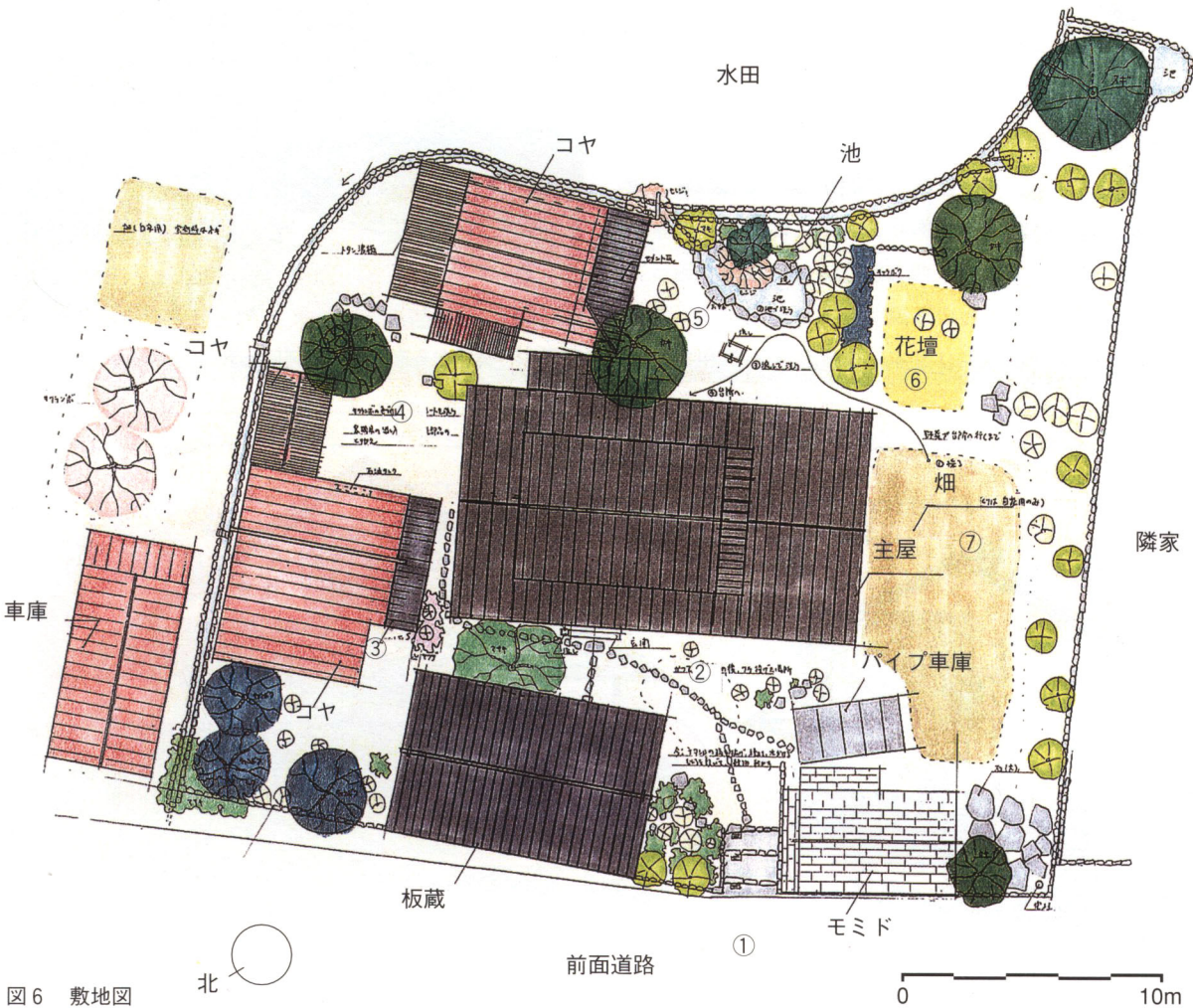


図6 敷地図

○船越庄治邸

船越庄治邸は路村部にあり、南南西側に前面道路を持つ。敷地は間口に対して奥行き長い短冊形である。

(1) 屋敷構え

敷地境界には石垣が施される。西向きに下がる地形なので、敷地境界は東側で道路のレベルと同じであり、西側は2～3段の石積みになる。主屋は前面道路に対して直交する向きに建つ。主屋に平行して土蔵が建つが、その位置は主屋中心から北西（乾）の方向である。また、奥にコヤが建つ。

他の調査住宅のように前面道路に対して門構えのように建つ付属屋も、また郊外住宅地のような塀もなく、開放的な外観となっている。イチイ、マツなどの庭木、石垣から垂れ下がるシバザクラやマツバギクが美しい。

(2) 主屋

昭和11年のづくりであり、伝統的な民家とも現代の住宅ともづくりが違っている。外観は真壁造、6寸勾配の屋根をスレート瓦で葺いている。内部は伝統的な民家比べて土間がなく、その位置には囲炉裏と流しのある板敷きの間（台所と呼ぶ）があり、上手には畳敷きの座敷が六間取りになっていて、西と南に4尺の縁側が廻っている。養蚕用の間取りという説明である。

現在、新築される住宅は歴史的な風景と不調和なもの

が多いが、その点で船越邸の外観は大いに参考になる。集落の風景にとけ込み、美しく、しかも現代でも十分新築可能な建築である。



写真11 土蔵と主屋、庭



写真12 道路から玄関へのアプローチ

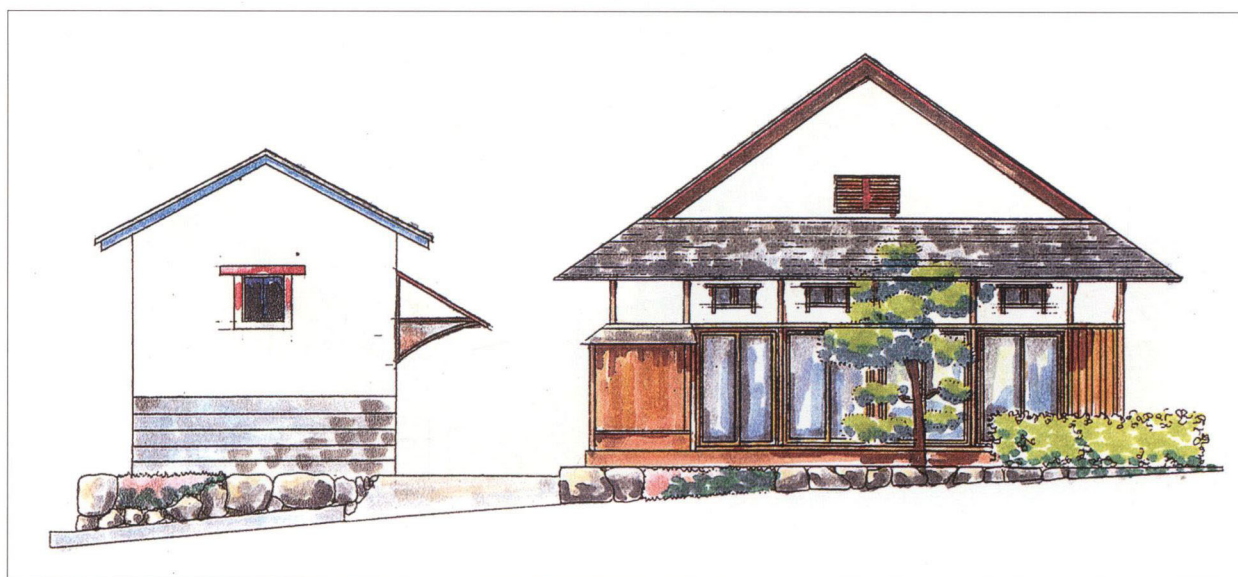


図7 前面道路側の外観（主屋と土蔵）

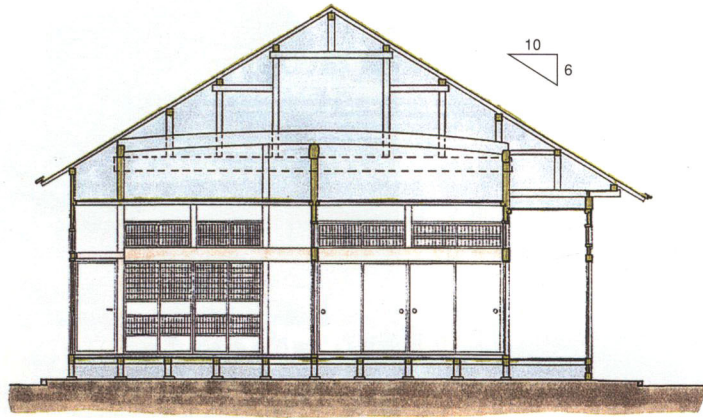


図8 主屋断面図

0 5m

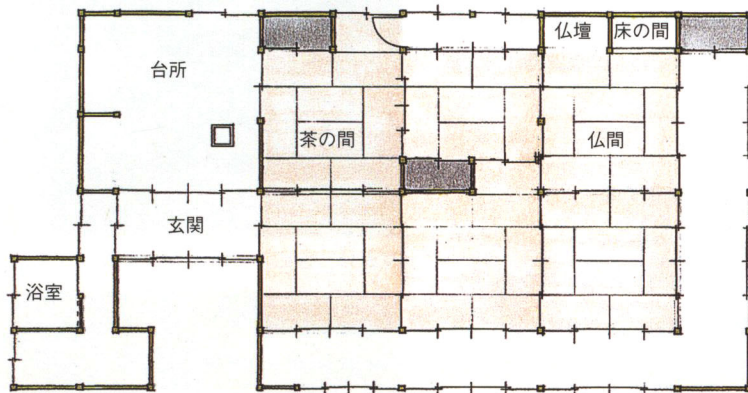


図9 主屋平面図

0 5m

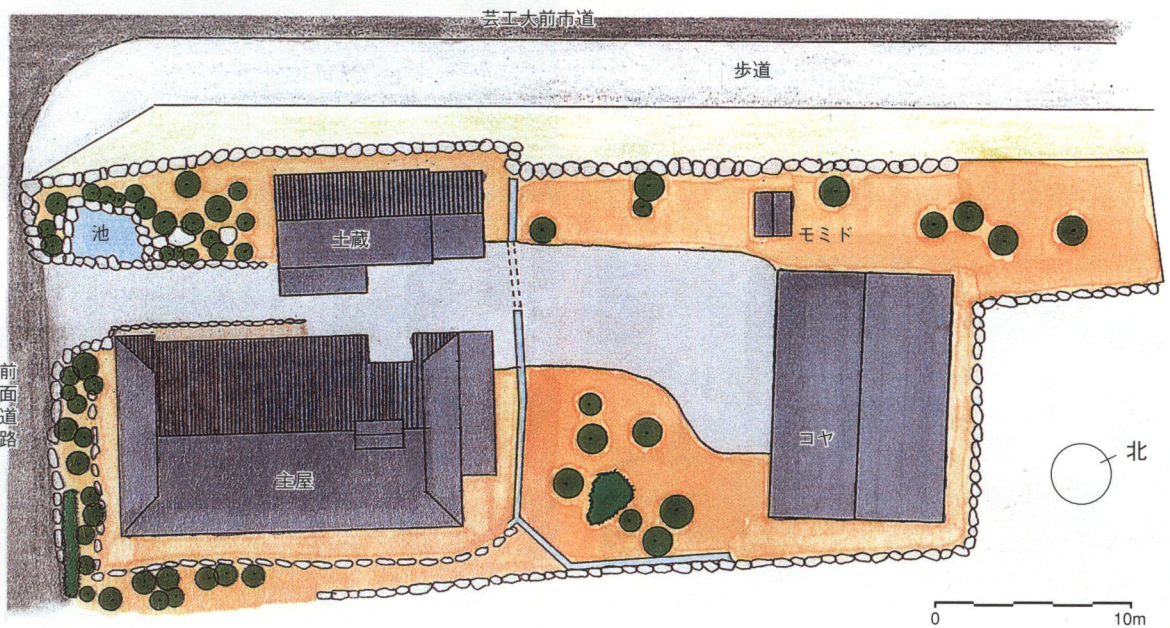


図10 敷地図

0 10m

○志鎌忠雄邸、志鎌重雄邸

忠雄家が本家、重雄家は分家である。両家の屋敷は路村部にあり、西北西側に前面道路を持つ。それぞれの敷地形状は短冊形に近いが、分家以前の形状はほぼ正方形である（果樹園を除いて宅地のみで）。

忠雄家の主屋は既に建て替えられ、道路に平行配置である。重雄家の主屋は調査中に建て替えられ、道路と直交している。分家した重雄邸の向きが直交するのは、本家と互いに見える配置としたためと言う。

（１）道路から見た外観

道路から見た外観は極めて魅力的である。敷地は道路より僅かに高く、石垣が1～2段積まれている。入口の両脇を、忠雄邸ではモミドとコヤ（カヤの木が道に張り出す）、重雄邸ではモミドと土蔵が固め、両家の間には堰が流れる。

（２）敷地内の構成…庭園として見立てる

志鎌家の敷地内には様々な建物、場所があり、しかも道路から一番奥の神社まで緩やかな昇り勾配となっている。調査に訪ねた折りその魅力に感心し、斜面に建つイタリアのヴィッラの庭を連想した。以下、昇りながら展開する場、場面。

①道からの外観、②農作業の庭（コヤ、土蔵、重雄邸では元は茅葺きの主屋が囲む）、③座敷前の庭（忠雄邸。戦前既に整備）、④石積み、⑤井戸（保護の屋根付。フォリーに見立てられる）、⑥ニワトリ小屋、⑦池（石組み、植栽を施し整備）、⑧畑、⑨果樹園、⑩裏側の道の祠（ここで堰が分かれる）、⑪神社

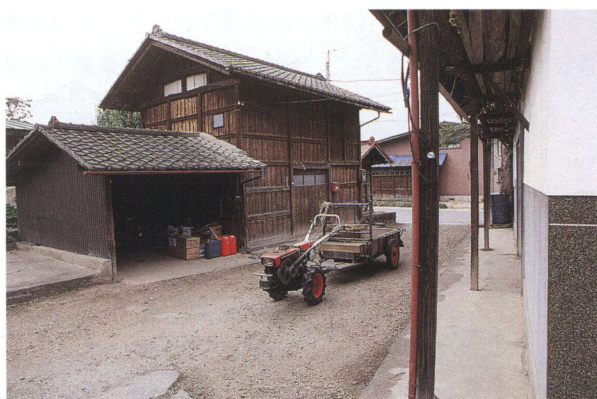


写真14 農作業のための庭 ②



写真15 座敷から眺める（座敷前の庭）③

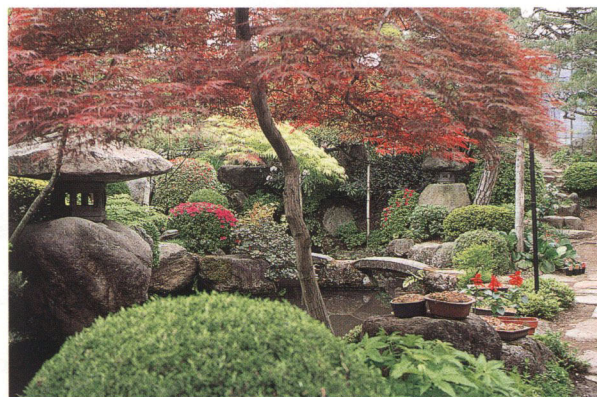


写真16 裏側の庭（池、石組み、庭木）⑦



写真13 通りに面した外観（土蔵、もみど、カヤの木）①



写真17 月山神社（村社。元々志鎌家神社）⑪



図11 断面図

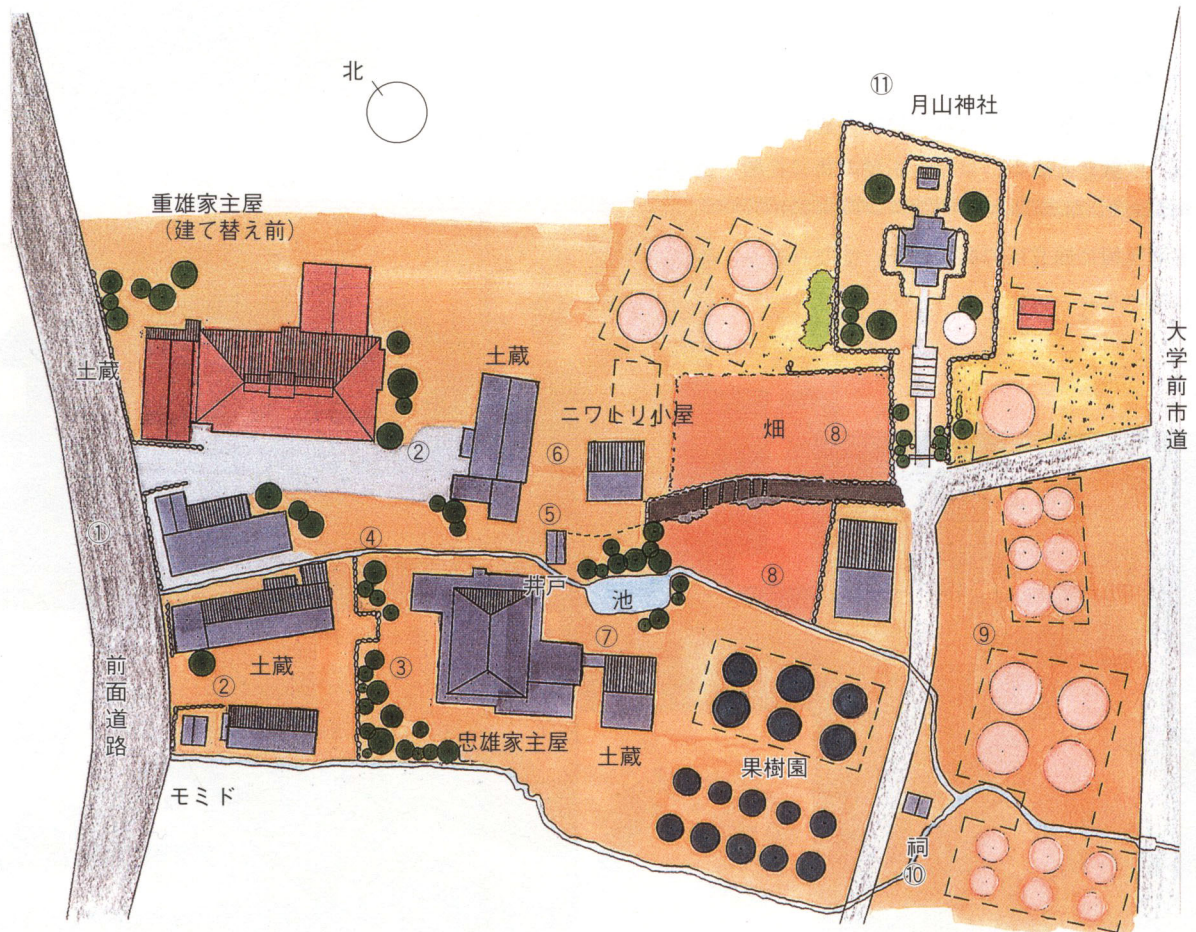


図12 敷地区

○荒井治幸邸

散居部にあり、西北西側に前面道路を持つ。間口は大きく正方形に近い敷地形状である。

(1) 道路からの外観

道からの外観は、今回の調査住宅中最も閉鎖的であり、角度によっては関西の囲みづくりに近い印象を与える。道に面して並ぶのは、石垣の上に建つ土蔵、モミド、コヤであるが、コヤが敷地角に沿ってL字に曲がっているため特に閉鎖的な印象をつくっている。屋敷に入るとモミド裏に井戸があり、かつては道行く人がここで休んで喉を潤したと言う。

敷地の両脇は石積みの堰が流れる。南側の堰には区画整理の工事前までカワシジミが、またかつてはゲンジボタルいた。

(2) 敷地内の構成

主屋は既に建て替えられていて、道路と平行な配置である。屋敷に入ると、コヤと主屋の間に花壇と自家用の畑がある。

主屋南側に観賞用の庭があり、池と石組み、庭木を植栽している。

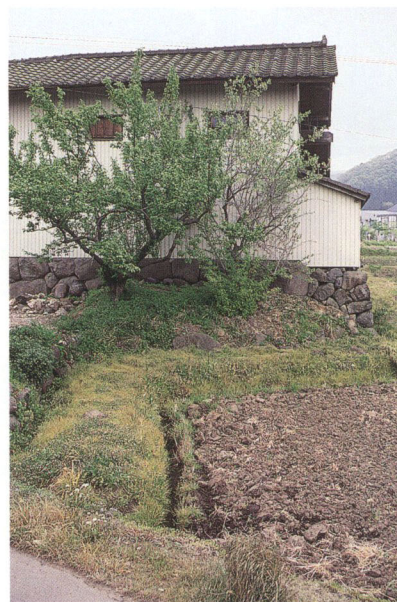


写真19 敷地境界を流れる太子堰
(カワシジミが生息)



写真20 コヤ、モミドと井戸

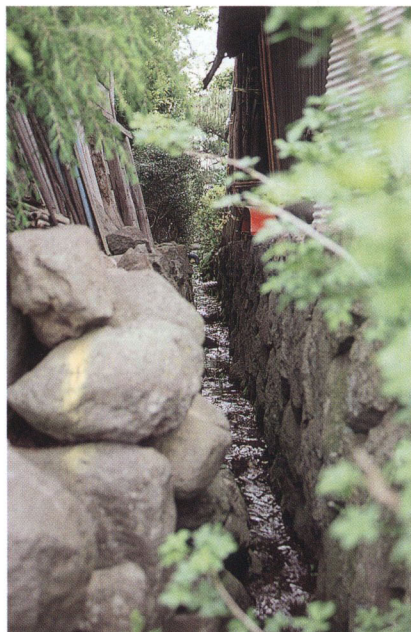


写真18 敷地境界の堰



写真21 土蔵、コヤで囲まれた閉鎖的な外観

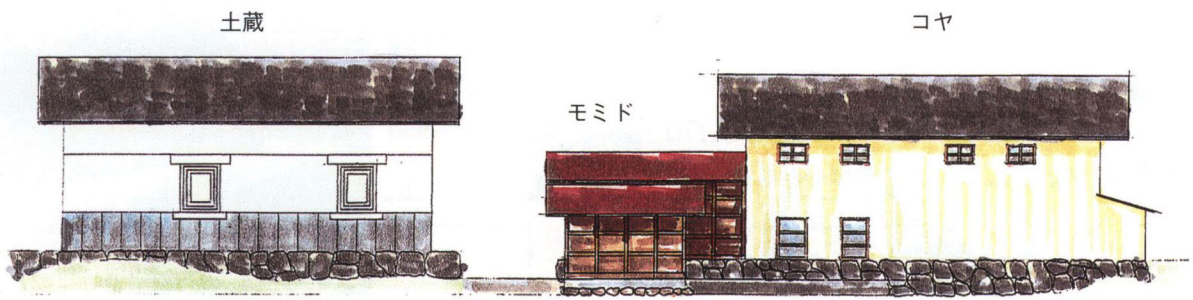


図13 道路側立面図

0 5m

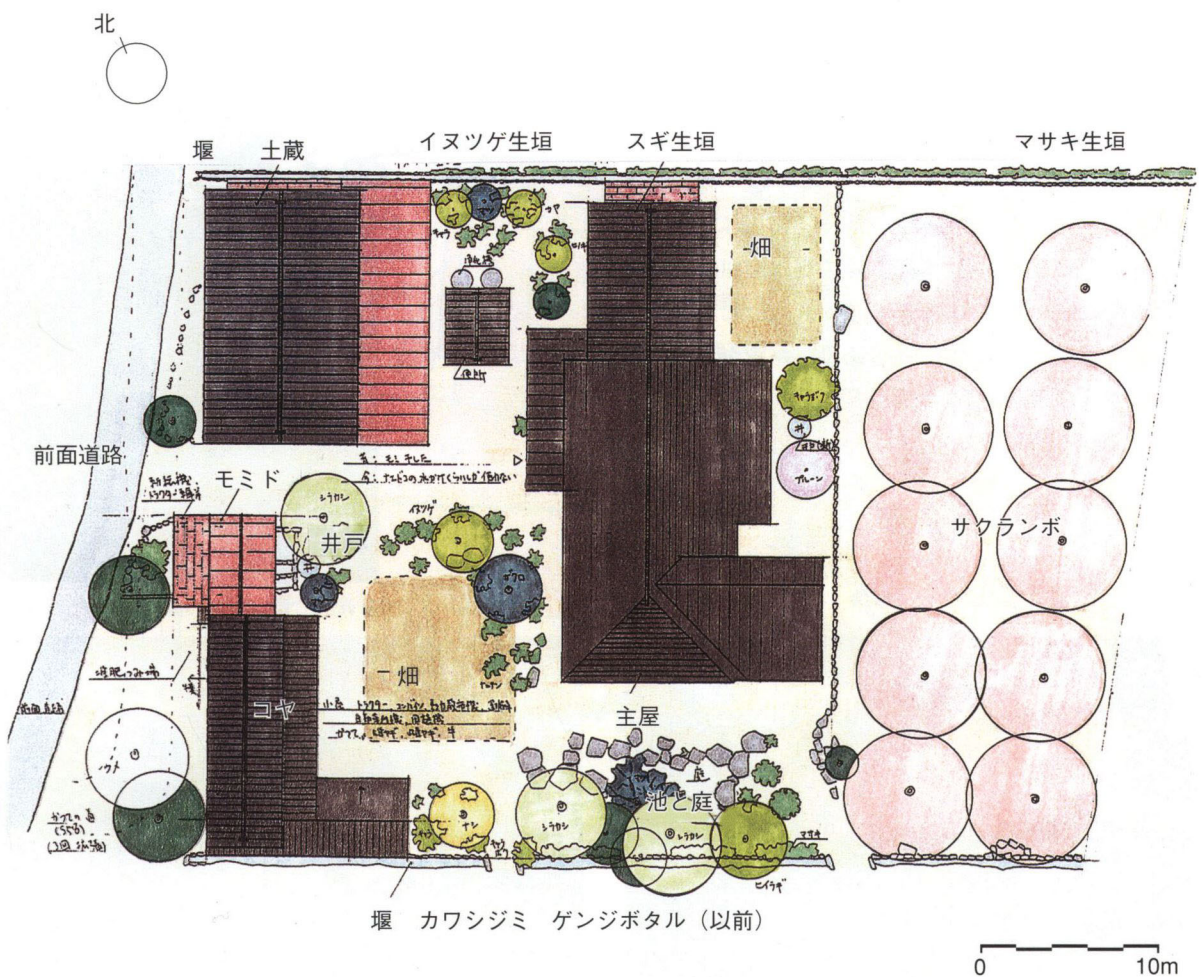


図14 敷地図

0 10m

○柴田とみ邸

散居部にあり、もと上桜田集落の名主の家である。写真6、写真7の熊野神社は柴田家の神社である。西側に前面道路を持ち、敷地形状は間口方向が長い。

(1) 道からの外観

石積みの上に土蔵、モミド、コヤが建つ。入口は土蔵とモミドの間である。モミドの前は、近年石積みの上にコンクリート・ブロックを6段積んでいる。道に面した車庫があるが、端の方であるため、全体の外観を損ねることはない。

(2) 主屋と庭

主屋はトタンを被せただけで元の形を維持している。元の平面を復元すると、広間型三間取りを基本としつつも各部屋が大きく、土間の位置には板敷きの台所とニワザシキ（土間の反対側につくった座敷）がつくられ、土間面積は小さい。上屋梁間は3間であり、桁行方向に拡大することで床面積を増やしている。また、奥に直交する向きで蔵座敷がつく。

蔵座敷から主屋上手の座敷にかけては、池に石組み、庭木を配した庭を眺められる。現在の庭は昭和42年に整備したものだが、庭自体はそれ以前からあったと言う。

一般に農家のつくりは閉鎖的であり、座敷から眺める庭をいつ作ったか興味深いが、今回の調査ではこれ以上掘り下げることはできなかった。



写真23 通りに面する外観・初夏(蔵、モミド、コヤによる閉鎖的な外観)

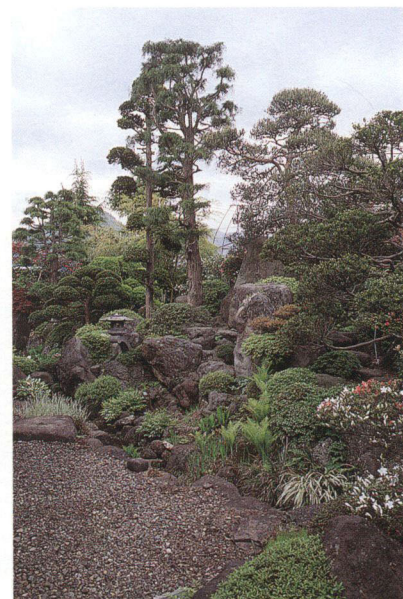


写真24 蔵座敷前の庭



写真22 主屋



写真25 通りに面する外観・早春

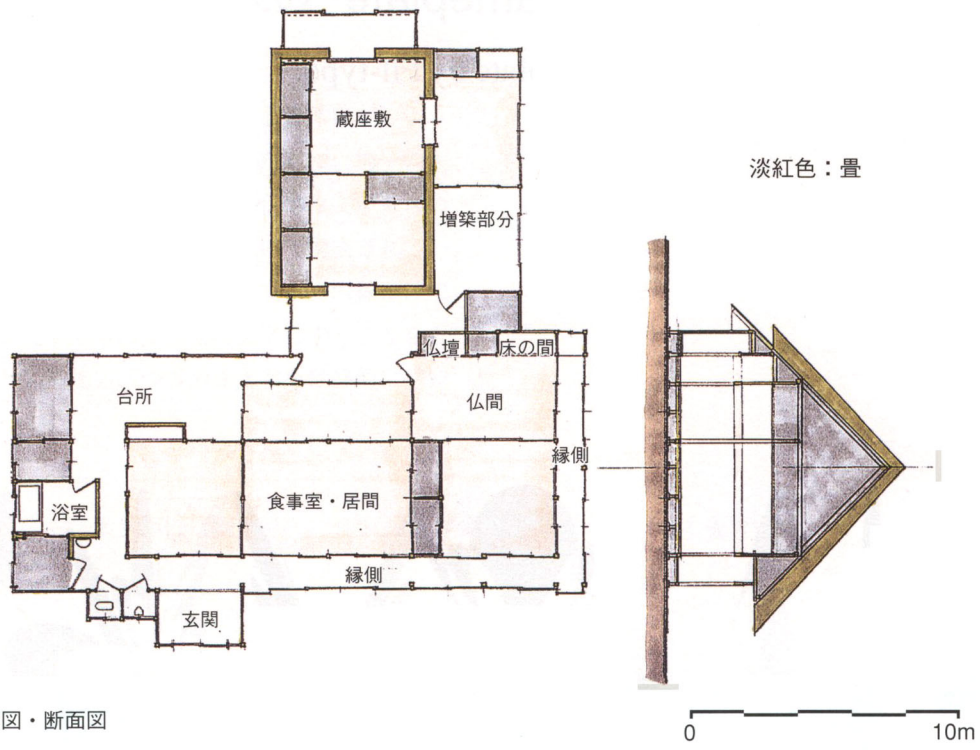


図15 平面図・断面図

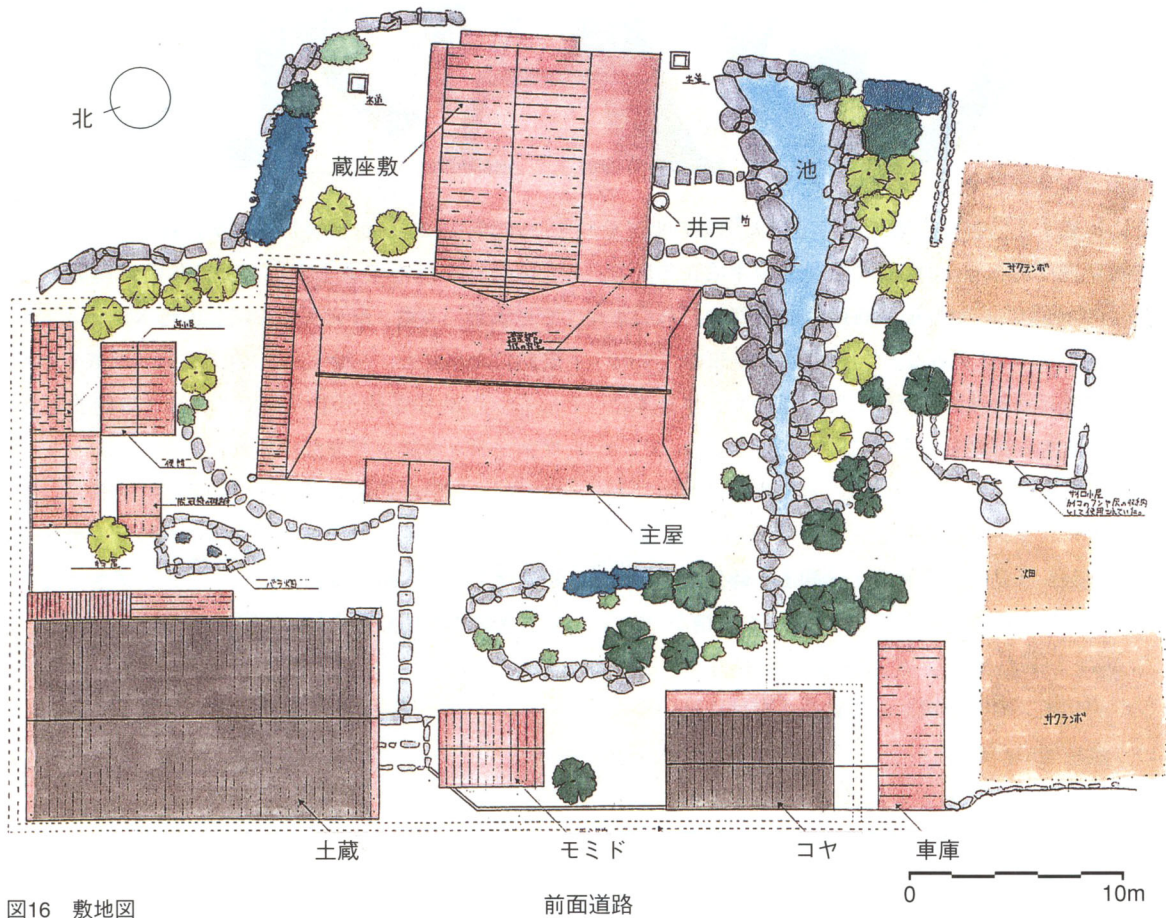


図16 敷地区